

書評

スピノザの想像力とアイデンティティ——多様性というロジックについての考察——

吉田 耕太郎

一

過去の哲学者の思想に照らして、現代のアクチュアルな問題を考えるという課題は、思想史研究の根底につねに存在している根本的な関心である。ここで取あげる Moira Gatens and Genevieve Lloyd, *Collective Imaginings - Spinoza, Past and Present* (Routledge, 1999) も、まさにこのような課題を自覚的に遂行している一書である¹⁾。著者は、十七世紀の哲学者スピノザ Baruch Spinoza (1632-1677) を鏡として、アイデンティティという問題系を掘り進めようとしている。本書は、著者がフランスの哲学者ジル・ドゥルーズの言葉を借りて表現するように、過去の哲学者について〈別の仕方で考えること〉の可能性を提示するものでもある。しかし、その問題設定や問題解決が、かえって問題を覆い隠す場合もある。本稿では、アイデンティティ構成において働いている多様性という概念と、その概念が孕む問題の側面を指摘してみたい。

著者が出発点としているのは、複数のアイデンティティがあるということ

と、そしてそこには均質的なものへと回収されないズレがある、という経験である。この経験は、コミュニティアニズムとリベラリズムのアポリアにもなる。つまり、社会の方を重視するかという枠組では、アイデンティティを適切に捉えることが出来ないという問題である。個人というものは社会というものがあつて初めて可能になるとされたり（リベラリズム）、また社会は個人というものがあつて初めて可能になるとされたりする（コミュニティアニズム）。著者は、この種の論争の中に自らを位置付け、このアポリアを解決するという目的のために、スピノザ哲学を別の仕方で解釈した。

二

周知のように、デカルトが思惟するものと延長するものという形で二つの実体を導入したことを受けて、スピノザは、このデカルトの二つの実体の区別を、神という唯一の実体の二つの属性、つまり属性の区別として捉えなおした。しかし、この両者は共にある実体観を共有している。その実体観とは、

様々な性質を支える基体として実体というものである。デカルトにおいては、実体とは、われわれが認識する様々な性質を支えるものとして持ち出された。そしてスピノザにおいても、属性はそれこそそれ以外の何ものでもない実体の属性、実体の無限性を表現する属性として位置付けられている。このような両者の実体観が、共にその対抗するもの、つまり批判するべき相手として念頭においているのは、なんらかのある特定の本質を満たすような実体観、つまりある特定の、変化しない、均質的な本質（定義）という形で考えられる実体であり、偶有的なものが述語付けられるような、ある非偶有的な本質を有すると考えられる実体観である。

スピノザは、実体を唯一なものとし、その実体は無限な属性によつて表現されるしかないと主張する。それゆえ、ある特定の本質に相当するような実体が必然的に存在することを一切認めない。これまで類や種というかたちで考えられてきたような実体を否定し、これらを延長と思维という二つの属性の様態として考えよう要求するのである。つまり、個々の人間が共有するような人間一般や動物が共有するような動物一般といった、（類、種的）本質という形で実体の存在を批判するに留まらず、このある一定の均質性を有する本質といったものを、有限で不定なもの、スピノザの述語を使うならば、様態間の動的な関係から捉えなおす道を提示しているのである。

著者のスピノザ解釈は、まさしくこのような地点から始まっている。つまり不定で未規定なものから、いかにしてもある一定の均質性を持つものが現れてくるのか。そのメカニズムをスピノザの想像力から読み取ろうとするのである。

まず著者は、想像力が作動する場所に着目する。それは次のようなスピノザの想像力についての定義において示されている。「スピノザにとつて想像力とは身体についての意識である」[p.12]

ここで明らかにしなければならないのは、身体の意識としての想像力である。身体とその意識という表現で、想像力はどうのように定義されているのであろうか。この身体と意識という語の含意を理解する上では、スピノザの哲学の有名な整理である平行論が役立つだろう。平行論とは、延長と思维という二つの属性の間に影響関係を認めない思想である。観念的なものの優位や、逆に物質的なものの優位のような序列関係を考えない。想像力が働く場所とは、この平行論が示す場所、つまり観念的なものと物質的なものが並行的に働く場所なのである[ibid.]②。

では、なぜ想像力は身体と関係するのであろうか。人間精神とは何であるのか、そしてこの人間精神はどのように構成されているのか。これは『エチカ』第二部の基底に流れている問いの一つであった。「人間の本質は、必然的存在を含まない」[Ethica II, axiom. 1]。つまり、あらゆる場合において人間というものを規定するかどうかのような人間の本質・形相のようなものは存在しない。「人間の本質には実体の存在は属さない、あるいは実体は人間の形相を構成しない」[Ethica II, prop. 10]とも言い換えられている。スピノザにおいて実体とは必然的に存在するものである。それに対して、実体としての人間、つまり人間一般という本質や、人間一般という形相・定義は、必然的に存在しない。「同じ本性を有する二つの実体は存在し得ない。しかし多くの人間が存在し得る。それゆえ、人間の形相を構成するものは実体の存在

ではない」[Ethica II, prop. 10 scholium]。われわれは、人間の本質が存在しないのにも関わらず、このような複数にあてはまる人間一般のようなものが存在しようとわれわれが考えてしまうが、まさにこのメカニズムが問題なのである。

人間なるものという本質や形相は存在しない、それにもかかわらずわれわれが抱いてしまう人間なるものとは何であり、それはいかに構成されるのか。人間は必然的な存在ではない [ibid.]、それゆえ「人間の本质は神の属性のある様態的変状から構成されている」[Ethica II, prop. 10 corollarium]。人間精神は、実体ではなく様態から考えられなければならない。「全ての様態にあつては、観念が本性上先である。…従つて、観念は人間精神の存在を構成する第一のものである」。しかし、様態とは、神の無限の属性を一定の仕方で表現するものであった。だから必然的ではない人間の形相を構成するのは、無限の神の属性が存在している間だけ存在していると考えられる無限を表現した様態ではなく、時間的に持続する現実存在する様態である [Ethica II, prop. 8]。「人間精神の現実的存在を構成する第一のものは、現実存在するある個物の観念に他ならぬ」[Ethica II, prop. 11]。スピノザはこの第一のものを分かりやすくするために [Ethica II, prop. 11 scholium]、この有限な様態的変状、つまり個物の観念を次のように言い換える。「人間精神を構成する観念の対象は身体 (corpus 物体) である」。そして「精神は身体の変状の観念を知覚する限りにおいてのみ自分自身を認識する se ipsam cognoscit」[Ethica II, prop. 23] と言われるように、人間精神は、このように身体の観念によって自己という人間精神を形成するとい

うのである。確かに、人間精神を構成する観念の対象が身体である、というこの主張に関しては、われわれは身体をもたなければならないというスピノザの平行論で片付けることが出来るかもしれない。ところが、重要なのは、この人間精神を構成する身体の観念で何が考えられているのかということである。このことに注意を即すように、著者は次のように述べている。「想像力は、スピノザにおいて、身体の現実性 (現実にある身体 bodily reality) と直接関係を有する」[p. 12]。スピノザにおいて身体とは複数の個物から構成されているものである。強調されているのは、均質的な人間の身体はあり得ないということである。身体は極めて多くの個体から構成されているのであるし、その構成している個物も複雑であるからだ。またそれは、その個体が均質的な安定した存在を有する実体ではないからである。「物体は、実体という点ではなく、運動及び静止、早いか遅いかという点で相互に区別される」[Ethica II, lemma 1]とスピノザが述べる様に、これら個物は、個物相互の運動によって区別されるものでしかない。身体的現実とは、このような個物の関係つまりコナトウスの動的な関係として言い表わされるような動的な性格 dynamic character [p. 13] を有するものと考えることができる。そしてスピノザが「人間精神の形相的有を構成する観念は単純ではなくて、極めて多くの観念から組織されている」[Ethica II, prop. 15] と言うように、人間精神の形相も、このような個物の観念から組織されたもの、このような複雑な個物の観念から形成されているものとして捉えられることになる。

スピノザはこう述べる。「この帰結として、第一に、人間精神は自分自身の身体の本性と共に、極めて多くの物体の本性を知覚するということになる

る」[Ethica II, prop. 15 corollarium 1]。しかし注目しなければならないのは、「第二に、われわれが外部の物体について有する観念は、外部の物体の本性よりもわれわれの身体の状態をより多く示す」[Ethica II, prop. 15 corollarium 2]という帰結である。われわれはこの二つの帰結から、想像力は精神にも関わる[p. 13]という著者の想像力について述べた別の定義、そして、想像力が身体の意識と何ゆえ言われなければならないのかという点について理解できる。

二つの帰結の間には、ズレがある。人間精神は、自分自身の身体と同様多くの他の身体をも知覚しているにも関わらず、その観念は、自分の身体の状態を多く示すのである。精神は、現在のであるかのような表象する。ここに現れるのが想像力である。「人間身体の変状——われわれはこの変状の観念によつて外部の物体をわれわれに現在のなものとして思い浮かべるのである——は物の形状を再現しないけれどもわれわれはこれを物の表象像 *imago* とよぶであろう。そして精神がこのような仕方では物を観相する時にわれわれは精神が物を想像・表象する *imaginari* というであろう」

[Ethica II, prop. 17 corollarium]。このズレは、このコナトゥスつまり個物の動的関係に関わる想像力が、動的関係に関わるものでありながら、動的関係を身体の変状として想像していることによつて生じる。このような身体への関係の仕方を有するがゆえに、想像力は、このような身体の動的関係そのものではなく、その意識として語られるのである。このような想像力は、コナトゥスの動的な関係に直接関係するが、このコナトゥスの動的な関係を記憶として保持し [Ethica II, prop. 18 scholium]、そしてその関係を、あ

る固定的な表象像として想像する。このような想像力は、むしろ動的な関係をそのままうつすというよりも、ある特定の身体の変状としての表象像を形成するものである。想像力が、コナトゥスの動的関係から人間精神を形成すること、それは著者の言葉を使えば、想像力は、コナトゥスの動的関係から、われわれを、現にそうある特定のわれわれとして規定するものである [p. 76]。

三

著者はこのような身体の意識として位置付けられたスピノザの想像力に、アイデンティティー形成のメカニズムを読み込む。このスピノザの想像力の位置に関して、重要なのは、繰り返すことになるが——しかし今度は著者の主張に重点を置くが——、この想像力が、原理的に、コナトゥスの動的な関係、つまり無規定なものにかかわることである。コナトゥスとはそれ自体では、規定された安定したものではなく、絶えず他のコナトゥスとの関係において規定されるものであった。それゆえ、この無規定さという側面が強調されることによつて、このアイデンティティーが有する規定性、そして構成されたものという性格が一層明らかになる。しかしこのアイデンティティーは、構成されたということから、全く現実性を欠いた虚構であるわけではない。

この構成されるアイデンティティー、スピノザの言葉でいえば表象像、感情とは、自己や他者というものを越えた動的関係からそのつど形成される

ものである。したがって、決まって現実的で社会的な性格を有しているものである。複数の人間にも妥当するような人間形相のようなものとしても通用する。このようなアイデンティティの性格を、著者は、エチエンヌ・バールのスピノザ解釈、特に彼が提示した多様性、多様態 *multiplicity*, *multitude* という概念と比較しつつ明らかにする [p.67]。つまりアイデンティティとは、あらかじめ与えられるものでなく、動的な関係としての身体の現実性、刺激による複雑なネットワークから構成されるものであり、それゆえ、このアイデンティティも本質的には決して均一ではあり得ないということ、つまりアイデンティティは本来的に多様なものであるということである。このようなアイデンティティとは、自己における多様態 *inner multiplicity of selfhood* [p.51] と呼ばれるようなものであり、絶えず再構築に開かれている。まさにこのようなアイデンティティの性格を可能にしているのが、想像力であり、このような想像力は、社会的実践という意味を持つ。

更に著者によれば、このようなアイデンティティ論は、ハンナ・アレントが提出したような集団の責任という問題や、冒頭でも触れたような社会理論を巡る二つの潮流——リベラリズムかコミュニタリアニズムか——の中で議論を行う際に有益な論点を提示する。われわれは、アイデンティティというものを他者との動的な関係の中でそのつど構築する。このようなアイデンティティ形成のメカニズムは、その当該の人物が何を行ったのかという点で追うべき責任とは違った責任についての論点を提示する。この想像力のメカニズムが可能にするアイデンティティとは、時間経過において多様

に構成され再構成されるものである。われわれは何を行ったのかという点ではなく、われわれがその時点でのどのようなアイデンティティを構成したのかという点で、そのアイデンティティには社会的な意味が含まれていることになり、そのようなアイデンティティを構築した者は、既に社会的な責任を負うものになる。

そしてまた、このようなアイデンティティ形成においては、あらかじめ存在する個人というもの、それと同時に、あらかじめ想定されるような社会的規範のようなもの、そのどちらも前提にすることは出来ないという点もあきらかであろう。著者はスピノザの意志の扱いにならって、とりわけ意志というものが、個人にあらかじめ備わっているという考え方を批判する。スピノザにおいて自由は感情を理解することによってはじめて達成される。そこでは、自由というもの、また自由を有するであろう自己というものがあらかじめ存在する、という考え方が批判されている。つまり自由やそれを有する自立的な個人というものを素朴に想定することは出来ない。自由とは（他のコナトゥスという意味での）他者との実践のうちで獲得される感情とその感情の理解という形で得られるものであるように [p.60]、自己というものは、既に確認したように、自他の区別の無い動的な関係から形成されたものなのである。

同時にあらかじめ存在する社会的な規範もない。「国家論に関して、私とホッブズとの間にどんな相違があるかとお尋ねでしたが、その相違は次の点にあります。すなわち私は自然権をそのままそっくりそのまま保持させています。それ故、どんな政府の力も、市民に勝っている度合いに相当するだけ

の権利しか市民に対して有しないものと考えています」[Epistola II]。スピノザは、市民に対して上から一方的に行使されるような権利というものを、素朴に認めてはいない。感情というものは、あらかじめ確定された善／悪の判断基準ではなく、極めて個別的な状況の中で、諸個人の実践の中で獲得されてゆくものであるということなのだ。このような点から、社会理論に関する二つの潮流とは異なるアイデンティティーについての考え方をスピノザの想像力は提示すると、著者は評価するのである。

四

著者の提示する想像力論は、その二つの側面を強調している。ひとつは、絶えざるアイデンティティーの構築と再構築を担うという役割である。そしてこの役割に応じる形での、いまひとつのそれは、感情、アイデンティティーが形成される局面としてのコナトウスの動的關係に対して、未規定なもの *the indeterminate* [p.80] という性格が与えられるという側面である。この二つの側面は互いに補足しあう形で、この想像力論の構成つまり上記のような多様性を可能にする。コナトウスの動的な関係は、未規定なものであり、そこから规定的なアイデンティティーがあらわれてくるという未規定と規定という項からなるロジックである。しかしここで、アイデンティティーがうまれる源泉としての動的關係という局面は、これ以上論じることの出来ない局面として規定されてしまっている点に注意しなければならない。

この多様性が孕む問題点は、例えば著者の共可能性という主張において

も顕著ではないだろうか。著者は、コナトウスの動的關係から、そのつど形成されるアイデンティティーを、共可能的 *compossible* なもの [p.68] として性格付ける。この共可能性ということで含意されているのは、そのつど調和したものが形成されるということ、つまりそのつど構成されるアイデンティティーは、コナトウスの動的關係の中で、そのつど調和した一として構成されることである。これはスピノザの言う組織化に対応した主張であるが、著者はコナトウスの動的關係のメカニズムのうちに、喜びと悲しみという感情を素朴に設定し、それをアイデンティティー構成において働いている基礎的な原理という形で前提にするのである。結局このような想像力論では、アイデンティティーの形成とは、意図せず著者が述べる通り、感情の総和、つまりコナトウスつまり差異の交渉 *negotiating difference* としてしか考えることが出来ないのである。実際のところ、著者自身も、自らのロジックが孕む問題に気づいてはいる。未規定なものの中から生じるアイデンティティーが、未規定なもの全てを汲み尽くすことはできない。著者は、このアイデンティティー形成において排除されるものを救おうと試みる。しかしこの排除してしまうものが未規定という規定しか与えられていない以上、この未規定な動的關係はこの規定としてのアイデンティティーが絶えず再構成に開かれているという形でのみ救われているに過ぎないのである。確かに著者が提示する動的性格の強調は、均質的なアイデンティティー批判としては妥当であり、新たなアイデンティティーの考え方を提示する。しかしこのような未規定なものとの规定的なものとの相関関係で考えれた多様性という概念では、アイデンティティー批判という点でも不足であり、アイデンティ

ティーを積極的に語る可能性をも否定してしまう。

たとえば、著者は、感情というものを素朴に前提としているが、感情もある一つの価値判断である以上、そのような感情を素朴に前提とすることはできないのではないか。というのも、今日われわれは、ある種のヘゲモニーという権力体制、つまり権力というものが喜びや悲しみといった基本的な価値基準をも用意するという事態を無視することができないのである^③。このような状況に対して、著者がアイデンティティー構成において設定した感情という概念では十分に答えることができない。また今日の忘却の忘却の問題、つまり汲み尽くせられなかったものの、そもそもその汲み尽くせられなかったということ自体が忘れられてしまっている問題についても、有効な論点を提示することはできないように思える。歴史記述をめぐる一連の議論等を思い起こすべきかもしれない。現在のこのような分野においては、このコンフリクトを記述するために、記述者による一方的な均質的な記述ではなく、しかし一つの記述として成り立つために、事柄の個性性を強調することや、また記述者をもこのような記述されるコンテキストへと参入するような様々な試みがなされている^④。このような試みと比較する時、著者の想像力の概念は、一見魅力的ではあるものの、コンフリクトを交渉として解決してしまっている点で、大雑把な装置であるとの印象を抱かざるをえないのである。

上記のような難点があるからといって、もちろん著者の想像力に関する議論の全てが無効になる訳ではない。著者の想像力論の中でも非常に有益だと思われる論点を二点最後に指摘したいと思う。

まず身体の実在性という論点についてである。この概念においては、個

物つまりコナトウスの動的な関係という事態が提示されていた。この動的関係においては、あらかじめある確固としたコナトウスや、アプリオリに妥当する価値等は認められなかった。つまり理論上という条件がつくにせよ、この動的関係には、あらゆるコナトウスは、平等に動的関係を織りなすという状況が含意されている。このような状況においては、あらゆるコナトウスはそのアイデンティティー構成の局面に等しく関係している。このような動的関係の有する側面は、たとえば、歴史記述における理想的クロニクルの理論的要請という問題構成に重なるものではないだろうか。つまり理論的にせよ、この動的関係においては、あらゆるコナトウスが排除されることなく参与しているのである。

そしてこのような動的関係に達することの出来る唯一の通路が、想像力であるという点も、忘れてはならないであろう。つまりこのようなコナトウスのコンフリクトを語ることができるのは、この動的関係に関わる想像力だけなのである。スピノザによれば、想像力とは、物体が存在しなくても、その物体を（自分自身に）現在式的であるかのように表象すること *velu nobis praesentia representare* と定義された。しかし、この存在しない物体を現存的であるかのように表象するその表象像は、必ずしも著者が論じたように、交渉の末に構築されるものと位置付ける必要はないのではないだろうか。それこそこのような表象像は、スピノザの言うように、全く存在しないものの像であるという点で誤りである。ただし、このような表象像も、想像力によって生じる以上、交渉の後にあらわれる多様なアイデンティティーと同じように、コナトウスを反映したものである。そのような表象像は、逆に、

アクチュアルな問題関心とはそれこそ別の仕方で表現されているのではないだろうか^⑤。このような表象像は、たとえば、それこそ非アクチュアルという点で抽象的で、とるに足らない、不可思議な出来事^⑥であつたりするのではないだろうか。歴史を逆撫するような、とベンヤミンが名づけたものは、このような形で想像されるものなのかもしれない^⑦。

① 著者の議論には直接関係ないが、スピノザの引用箇所指摘箇所等、資料的側面で若干の誤りがあることを指摘しておく。著者のスピノザ読解は、様々な問題への対応を行っているために非常に広範囲に渡るものであるが、本稿の再構成においては、スピノザの想像力の性格を明らかにすることが目的と考えて、必ずしも著者の議論、引用箇所に厳密に従ってはいない。本書の該当箇所は、本稿では割り注として「」のなかに示した。

② Vid. Moira and Genevieve, op. Cit., p. 12. このような平行論の考え方は、とくに著者が影響を受けているジル・ドゥルーズにおいて明確に示されている。この点については、同著者のスピノザ論である『スピノザと表現の問題』よりも以下の著作において簡潔に述べられていると思われる。ジル・ドゥルーズ & フェリックス・ガタリ『ミル・プラトー』十章を参照。

③ たとえばここでは、歴史学、地域研究等、とくにナショナルアイデンティティの構築をめぐるなされた議論を念頭においている。国民というものを形成する際に、権力体制が価値判断の基準を創設し、より良いものを目指すという形で、自発的、消極的な国民化を行ってきた、または現に行っている過程の批判は、様々な題材をめぐる議論されていることであろう。またここでは、晩年のフーコーの権力論——司祭権力——という形で考察された、生活のあらゆる局面へと介入している権力というものも当然念頭においている。

④ このような試みを個々に上げる必要はないであろう。執筆にあたっては、酒井直樹の一連の議論等を念頭においている。たとえば、「国際性によって何を問題化し

ようとしているのか」、「カルチュラル・スタディーズとの対話」（吉見俊哉、コリン・パークス編、新曜社、1999年）二八六―三二五頁で展開されている横光利一『上海』の読解。

⑤ ここでは、次のようなベンヤミンの示唆を念頭においている。「アクチュアルなものとの漠然としたアナロジーを提示しない歴史的对象」（Walter Benjamin, "Eduard Fuchs, der Sammler und der Historiker," in W. Benjamin, *Gesammelte Schriften*, II-2 (Suhrkamp, 1989) S179).

⑥ "merkwürdige Geschichten" (Benjamin, "Der Erzähler," in *ibid.* p. 444).

⑦ Benjamin, "Über den Begriff der Geschichte," in *ibid.* I-2, p. 697, 700の種の議論においてはベンヤミンがいまいちな形ではあれ、非常に興味深い論点を提示していることには異論はないであろう。たとえば、ヨネヤマ・リサ「記憶の未来化について」（小森陽一・高橋哲哉編『ナショナルヒストリーを超えて』、東京大学出版会、1998年）二二―二四八頁、とくに二三八―二四〇頁。

この論文においては、特定の思想家等を対象にこのロジックの検討をすることができなかった。この種のロジックの検討は、様々な形で行われている。たとえばこれが無意識の設定が孕む問題等と似た問題設定であることは、ここで指摘するまでもないことであろう。この論文の執筆において、とくに私が参考にしたのは、小林敏明の著作及び一連の論文である。『西田幾多郎——他性の文体』（太田出版、一九九七年）においては、ナショナルアイデンティティの構築において働く、無や空といった無規範的なもののロジックについて論じられている。